

2024年2月月次祭 大教会長挨拶

本日は、皆さんには雨のため足元の悪いところとお忙しい中をご都合をつけて、遠近を問わず2月の月次祭にご参拝をいただきまして、誠に有難うございました。また、日々は大教会の上にたくさんのお力添えとご真実をいただき、そして、教祖140年祭に向かってご丹精を下さり、誠に有難うございます。

はじめに、教祖140年祭の年祭活動も2年目に入り、祭文でも申し上げましたように来月の3月から6月まで、城山につながる全教会への一斉巡教をさせていただきます。今回私を含め15名の巡教員の皆さんで、全教会に足を運びつとめさせてもらいますので、巡教させていただく私達巡教員と、巡教を受けさせていただく教会の皆さんと、心一つになれる機会にしたいと思っております。そして、この巡教を通して2年目の年祭活動を、1年目より一人でも多くの方に喜んでつとめてもらえるように、心を込めて推し進めさせていただきたいと思えます。

ここで、話は少し変わりますが、城山につながる皆さんに二点お願いをさせていただきます。一点目は修養科生についてですが、昨年5月に修養科生をお与えいただいてから、それ以降今月までのしばらくの間、修養科への志願者がございません。

修養科は親神様・教祖のお膝元であるおぢばで、社会的立場や経験、経歴の違う人達が、陽気ぐらしという人間本来の生き方を学ぶところでもあります。さまざまな人達が寝食を共にし、教えを学び互いにたすけあって、世間では経験できない心の修養に励む3ヶ月です。そして、この3ヶ月間で親神様の教えから、ものの見方、考え方、悟り方が変わり、陽気ぐらしができる心の成人へと、お育てをいただける尊い機会でもあります。

修養科は、昭和16年に天理教校修養科として始まって、今年の10月に1000期という大きな節目を迎えます。そして、この節目となる年に、城山として修養科修了者数 10名の心定めをしているところでもあります。ですから、修養科の大

きな節目と教祖年祭のこの旬に、この人におぢばで伏せ込んでたすかってもらいたいという方がおられましたら、なんとか、おぢばの修養科へと送り出していただきますことを、深くお願いを申し上げます。

次に二点目ですが、ご本部の境内掛についてのお話しになります。境内掛とは皆さんもよくご存知の通り、おぢばの境内地内の清掃や、管理、警備、神殿で参拝される方の靴を綺麗に並べることなど、境内地内での安全につとめている部署であります。

近年、境内掛としてつとめて下さる方が減少をしていることから、現在ご本部の祭典日に境内掛のOBが毎月10名ほど、臨時の掛員としてつとめられているそうです。そして、そうした状況の中、城山では毎年境内掛1名の割り当てをいただいているところ、現在つとめられていない現状にあります。

そこで、新年度より境内掛の派遣対象者を、35歳以下の男子から60歳未満までに広げ、また、女性の掛員も募集することになりました。このように境内掛の体制も変わり、境内掛はおぢばに最も近い神苑周辺という大切な場所でのご用ですので、おぢばで伏せ込んで、将来教会の手足になってもらいたいという方がおられましたら、是非おぢばの境内掛をお勧めいただきたいと思います。

さて、能登半島地震が発生をしてから、今日で1ヶ月と3週間が経ちました。今もなお、少なくとも約23,000人の人達が、避難所や親戚の家に身を寄せたり、車中泊を続けたりして、長期に及ぶ厳しい避難生活をされております。そんな中私達お互いに、被災地の一日も早い復興を願ってお願いづとめをさせていただいたり、災害募金に協力をさせてもらったりと、自分にできる被災地への支援おたすけをされているところだと思えます。今日も祭典後に被災地の復興を願って、皆さんとお願いづとめをさせていただきますので、よろしくお願い致します。

能登半島地震が起きてから、うちの家内と色々と話をさせていただきました。その中で二人で特に共感したことは、これから日本全国のどこで地震が起きてもおかしくない状況にありますので、この度の地震を他人事とは思わずに、我が

事として受け止めることが大切だということと、そして、もう一つには自分のところが被災した時に、自分個人として教会として、何ができるのかを思案をし考える時だと話しました。

私達家族が、東京から大教会へ引っ越しをしてから、早いもので今月で11年が経ちました。そして、それから2年後位に地元の自治会の方から、災害が起きた時の一時避難所になってもらいたいとお願いをされましたので、何か力になればと受けさせていただきました。

今から6年位前に、過去最大級の台風24号が日本列島に猛威を振り、その影響でうちの教会は、アンテナや雨戸が飛ばされ破損をし、硝子が割れてトタンがめくれていたたり、雨どいが外れたりとあちこちに被害がありました。けれども、このような状況の中で、電気や電話は使えませんでした。ガスと水道は普通に使い、ご飯をガスで炊き食べることができましたので、有難かったことを今も覚えております。しかし、有難かったとは言え自分の教会のことが最優先になってしまい、災害時の一時避難所として、信者さんにお風呂に入ってもらうことができたものの、もっと他にもなにかできたのではないかと、今も心残りになっています。

城山のこの教会は初代会長さんの時代、昭和16年太平洋戦争が勃発をして、昭和20年都市への空爆が激しくなり、都市から疎開児童が増えたことから分散教室が設置され、教会が分散教育の場となって、地域のこども達の為にとめられたとの歴史があります。

私も大教会に移り住んで11年になり、この間地域に密着させていただこうと、細々ながらも地域の活動の上につとめてまいりました。しかし、まだまだ教会が地域に信用がある訳でもなく、地域に深く根付いておりませんので、これからも地道に地域に心をつないでいきたいと思っております。そして、万が一災害が起きた時には、自分達の為だけでは

なく困っている方に寄り添えるような、教会にならせていただきたいと思います。

最後に、私達はこの度の震災の節をどのように受け取らせていただくかは、私

達の心一つであります。これから先、どこで震災が起きても不思議ではありませんので、この度の震災を他人事とは思わずに我が事として受けとめて、被災した時に自分は何ができるのか、教会として何ができるのかを、今心積もりをさせていただく時ではないでしょうか。そして、その心積もりのもとに、被災地が一日も早く復興ができるよう、被災地に心寄せながら自分にできる支援おたすけに、精一杯つとめさせていただきたいと思います。